

---

# ガラス玉に思ふ

風亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガラス玉に思ふ

### 【著者名】

風畠

NO882N

### 【あらすじ】

両親に捨てられた少女葵と、

隣室に住んでいる、ちょっと変わった女の子、なっちゃんの物語。

ある年の夏の、胸がキュンと切なくなる短編。

子供の頃、住んでいたアパートの隣の部屋には、なつちゃんという女人が住んでいた。

? なつちゃんは、無口で意地つ張り

だけど、なつちゃんは、寂しがり屋で甘えん坊。?

同じアパートに住んでいる人達は皆、なつちゃんの事を「怖いね。」とか、「親の顔が見たいね。」とか、「一日中、家に閉じこもって何してるんだろうね。」とか、「不気味だよね。」なんて言ひけれど、本当は違うの。

なつちゃんには、家から出られない理由があるんだよ。<sup>わけ</sup>

なつちゃんはね、目が見えないの。

だから、アパートの急な階段は嫌なんだって。もし、降りている途中に足を踏み外しちゃったら、そこからどこまでも落っこちちゃうやうで、怖いんだって。何かに足を引っ張られて、

真っ暗な闇の中に引きずり込まれかけやつんだって。

「支えてくれる人がいたら良いのにね。」って私が言ひと、「やうだね。」って小さな声で答えて、困ったように笑うの。コンピューターを目の前にして、

キーボードを物凄い速さでカタカタと打ち込みながら、なつちゃんは笑顔を見せてくれるの。

いつの時か、「何してるの?」って聞いたら、  
「ん? これはね、遊びだよ。

「」の機械をね、こりやつて力チャカチャ弄つてね、遊んでるんだ  
よ。」

そう答えてくれたけど、それ、嘘だつたよね。  
だって、遊びなら真顔ではしないし、

集中して、それこそ、息を止めてまでする事じゃないもんね。  
画面には、よく分からぬ文字がびっしりと書き込まれていて、  
私には、それが何だか分からないけど、

何か凄い事をしてるんだろうな、って事だけは分かるの。  
だけど、それを皆に知らせないのは何故?

だって、悪い事じゃなくて良い事をしてるのに、

それも、とっても凄い事をしてるのに、秘密にしたいから?  
皆をあつと驚かせたいから?

……ひつん、違つよ。

なつちゃんはね、本質的な所で人を拒絶しているの。

人だけじゃない、この世界を構成しているものも一切、拒絶してる。  
時々、なつちゃんの横顔を見ていると、無性に、抱きしめたくなる  
の。

抱きしめて、守つてあげたくなるの。

そうしないと、なつちゃんが壊れちゃいそうで、

例えば、フッと一瞬だけ目を閉じて、次の瞬間には、

次に目を開けた時には、目の前からいなくなつちゃいそうで、怖い  
の。

怖くて、悲しくて、凄く、寂しいの。

だから今日も、なつちゃんの部屋に遊びにいくの。

私のお父さんとお母さんはね、そんな私を最初は咎めていたけど、

今はもう、何も言わない。

そう、何も言わない。

なつちゃんは今日も、  
キーボードを物凄い速さでカタカタと打ち込みながら、  
私がインターホンを鳴らすと、  
「入つて。」と鈴の音みたいな声が聞こえてきて、  
小さく笑つて迎え入れてくれるの。

あ、今日は、黄色のタンクトップを着てるんだ。  
何だか、なつちゃんのイメージとは正反対な気がする。  
だけど、凄く可愛いな。

ちょっとぴり青の色素が混じつた、内側にカールしている黒毛も、  
不健康なくらい、真っ直ぐな白さを保ち続ける肌も、  
パツチリとした大きな瞳も、形の良い耳も、口元に浮かんだ微笑み  
も、

全部がなつちゃんだ。

ああ、今日もいつも通りだ。

なつちゃんは、今にも泡に変身して、  
パチンと弾けてしまいそう。

危険な綱渡りは、今日も続く。

なつちゃんの笑顔は、綺麗なのに、痛々しくて、儂い。  
扇風機は、ブゥーンと機械的な音を立てながら、  
一定のリズムで左右に首を振つている。

テレビは、長い間使われていらないからか、  
画面にも外郭にも、埃が薄く被つていて。  
太陽の光は、時折、窓を通つて射し込んでくるけれど、  
この部屋は、いつも薄い闇に包まれてる。

電気は無い、あるけど、なつちゃんは使わない。

本棚には、難しそうな本が、二つも回じよひし、  
まちまちに置かれている。

倒れている本もあれば、立っている本もある。  
だけど、私には読めない字ばかりで、つまんない。

なのに、何故か、毎日、足しげく通っている。

なつちゃんは、あんまり喋らない。

ひたすら、よく分からぬ文字を打ち込んでいるだけ。  
時折、飼っているカナリアが、ピイツと小さく高く鳴ぐの。  
その声は、狭い部屋によく響いて、でも、一瞬のうちに、  
フツと消えちゃうの。

微妙に残る余韻を味わおうとするけれど、  
そうすると、ギュッと胸が締めつけられて、  
切なくて、苦しいの。

それでも、なつちゃんと一緒にいる時間が嫌いじゃないのは、  
たぶん、今から言葉にするのが正しいかは分からなければ、  
素直に思うのは、なつちゃんの傍にいるとホツとする、って事。

沈黙が、ゆっくりと部屋を覆っていく。

重苦しくない、包み込むような優しい沈黙。

だからね、葵は今、とっても幸せなの。

なつちゃんはね、いつも、「消えてしまいたい。」なんて思つてゐ  
けど、

その心は、悲しくなるくらい、強いの。

いつ消えてしまつても、世界は変わりなく廻り続けるのこ、  
そんな事を物ともしないなつちゃんは、

凄く、強いと思う。

だけど、強い人ほど、弱くて脆いんだ。

だから、アパートの人達は皆、嫌つたり遠ざけたりしてゐるけれど、  
葵の目には、氣高く美しく映るんだ。

なつちゃんが何をしようとしているのか、そんな難しい事、  
葵には分からない。

だけど、これだけは分かるの。

葵はなつちゃんの事、ずっと応援したい。

たとえ、世界がなつちゃんを見放して、  
どこかに棄ててしまつたとしても、

私は、なつちゃんの事が大好きだから。

無機質な瞳に僅かな光を湛えて生きているなつちゃんを、  
私はいつまでも覚えてる。

忘れない。

ずっと、いつまでも、私はあなたにメールを送り続けるよ。

今、この世界に、あなたはいない。  
なつちゃんは、永い眠りに入つたの。

いつ目覚めるかは分らない。

だけど、またいつか、目を覚ましてくれるって信じてる。  
だから、それまで、なつちゃんが遺してくれたプレゼント、  
大切にするね。

なつちゃんは私のために、3-Dの中で楽園を作ってくれてたんだ。

ある日、私がいつものように入つてみると、  
なつちゃんは静かに眠つていた。

揺すつてみたけど、起きなかつた。

寝顔は、何かを終えた達成感に満ちていて、安らかだつた。

なつちゃんが創つた楽園には、

甘いアイスクリームがあつて、香ばしくて美味しいチキンがあつて、  
ふわふわのベッドがあつて、

葵の好きな絵本も本棚にぎっしりと収められていて、

森の中には綺麗なお花があつて、

美しい小鳥も木々の間に沢山棲みついていて、

優しくて面白い人が、街には沢山住んでいる。  
パン屋さんも、魚屋さんも、八百屋さんも、  
CD屋さんも、本屋さんも、どんな店も揃っている。  
満たされた世界、全ての祝福を受け入れた世界。  
だけど、そこには、なつちゃんはない。  
駄目だよ、なつちゃん。

なつちゃんの居場所は、なつちゃんの世界にあるんだよ。  
私はいつまでも待ってるよ、ずっと、この部屋で。  
だから、早く戻ってきて。

(後書き)

コンピューターという機械が登場する点では、少々現実的ですが、それ以外の構成や全体的な展開は、なるべく童話に近い形にしたつもりです。

3-Dという超現実的な単語が登場する童話は嫌だ！  
……といつ苦情は一切受け付けておりません。（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0882n/>

---

ガラス玉に思ふ

2010年10月21日21時20分発行